

釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 1

砂川遊水池のワカサギ

鹿島釣狂



1月20日の釣果3. 35kg、1343匹。

【1月20日（水）8:00～15:00】

もうそろそろ砂川遊水池のワカサギの情報が聞こえてきてもいいころだと、釣具店に立ち寄った。しかし、店員の話によると、1月4日、砂川遊水池で釣り人の落水事故があり、救急車で病院に搬送された。それで、池には立入禁止の措置がとられているという。大きなニュースにはなっていないので釣り人は無事だったのだろうが、その後も釣り人の落水

事故が続き、1月14日の現在も開放されていないということだった。いつもの年なら正月が明けたら釣りのできる状態になっていたのですが、こんなところにも地球温暖化の波が押し寄せているのだろうか。

堀部安兵衛から電話が掛かってきた。「1月15日に警察の立ち会いの下で氷の状況を確認した結果、開放されるようになった。16日の勤務後に、砂川の様子を見に行ったら、いくつかテントが張られており釣果も上がっていた。それで、17日に行ってみたところ、順調な釣れ具合で型も大きく2kg超えの釣果だった。旭川の赤穂浪士たちに連絡したら、サロマ湖へチカ釣りに行く予定を変更して砂川に来ることになった。」というのだ。

私も旭川組に合わして19日に出動することにして、釣りエサを買いに行った。道具の準備にも熱が入る。昨年買ったリール「ダイワのわかさぎ棚ハンター」の滑りが悪くなっていたので、リールの軸にクレ556を吹きかけてみると、幾分滑らかになった。そして、仕掛に付いてくる2.5号オモリを付けて2階の階段上から階段下に向かって試してみた。なんとかリールが回って落ちていく。徐々に軽いオモリにして同じことを繰り返していると、女房が階段を上がってきて、奇妙な含み笑みを浮かべながら「楽しそうですね」と意味深な言葉をかけてきた。その通り。全くもって楽しいのだ。我ながら口元が弛んでいるのが分かる。

今度は、道糸の先に「ガマカツ ワカサギ集魚花火」を付けてカーペットの上を引いてみた。全く面白い動きをする。20本もの足を付けた足長蜘蛛がまさに這い回っているかの如くだ。ワカサギ釣りでは這わせて使う物ではないのだが、水中でも妖しく揺らめき、花火のように粹に華麗に誘う動きをするのだろう。投げ釣りでも使えそうだ。今度は「フジワラ 集魚シューター」を付けてぶら下げしてみる。ワカサギの鱗のような怪しげな光を放つ。その煌めく光に幻惑されて、ワカサギが群れをなして押し寄せてくる様子が目蓋に浮かんでくる。さらに、仕掛の上部に「カツイチ ブドウ虫フック」を付けた。去年の釣りで堀部安兵衛が使っていたのだ。フックに付けたブドウ虫のエキスが出て、この臭いに負けてワカサギが寄ってくるという代物だ。



左上：花火、左下：集魚シューター、右：ブドウ虫フック

1月20日(水)、満を持しての出動だ。7時に遊水池西側駐車帯に着いたが、先行車が1台だけだった。既に氷上にテントを張っていた釣り人に聞いてみると、今日は、猛吹雪になるという天気予報のためか人出が少ない。2日前はテントが10張りぐらいあったという。

準備が整い7時50分には釣り始めた。初めこそ1匹ずつの状態だったが、すぐに仕掛を入れた途端にアタリが出てダブル、トリプルと釣れてきた。それがいつまで経っても途絶えることはなかった。

6本バりに5匹連なってきた。惜しいと思って、よくよく仕掛をみると1本のハリスが切れていた。周辺の氷の上にはハリが落ちていない。慌てて今まで釣った魚の口元をみた。口の中にハリを残したままにしておく大変なことになるのだ。既に100匹ばかり釣ったのを1匹1匹丁寧に見ても釣りバリらしき物は見あたらない。これまで釣ったワカサギは処分してしまわなければならないだろうか。困ったことになったぞと、もう一度周辺を探していると、やっと原因が分かった。手元暖房の仕業だった。サシの付いたハリが反射板の端にくっついていたので。仕掛を上げた時にハリスが手元暖房に触れて切れていたのだ。ハリ1本でも紛れ込むとやっかいなことになる。ワカサギを天麩羅にするときに頭をとってからでないと調理には使えないのだ。人様の口の中、いやそれが食道や胃、腸でハリが刺さった様を思うとゾッとする。ワカサギの小さなハリといえども手術しなければならなくなるだろう。

携帯電話が鳴った。慌てて自分の携帯を取り出すと、その主は隣のテントだった。着信音が同じだったのだ。彼の釣り仲間かららしい。300匹ぐらい釣ったと応えている。私

も同じくらいだろうか。それからしばらくして、また隣のテントの電話が鳴った。今度は彼の職場からだったようだ。「今は滝川の得意先を回っている。昼頃には戻れると思うから。」 えっ？仕事を抜け出して釣りに来ていたのか。

いつもは10時頃になると一旦アタリは途切れがちになるのだが、今日は続々と釣れてくる。型も大変よい。小物は全くいないのだ。昼を回った。もう目標としていた千匹は超えただろうか。切りがないので、3時を終了の目処とした。

昼を回ってもアタリが途切れることはなかった。仕掛に付けた「花火」や「集魚シューター」の所為だろうか。それともブドウ虫の所為だろうか。どちらも仕掛から外してみた。しかし、釣れ方は変わらない。とにかくワカサギの活性が高いのだ。氷に開けた穴の表層まで浮いてきてキラッ、キラッと反転してはサシを吸い込む。いつもは30分おきぐらいに餌を付け替えないと釣れなくなるのだが、エキスの抜けた餌にも食いついてくる有様だ。普段なら底でしか掛からないウグイまでが表層に浮いてきて6匹も釣れてしまった。

目処としていた3時に終了した。家に帰って量ってみると3350gで1343匹だった。千匹を目標にしてきた釣りを大幅に達成してしまったのだ。これからは何を目標にすればよいのだろうか。今日はその目標をクリア出来そうなので、その事ばかりに気持ちが向いてしまって、休憩もろくに取らないで釣り続けた。釣れなくなると必ず手にする煙草を忘れてしまう釣れ方だった。お昼に用意したおにぎりさえ口にするにはなかった。

大量に釣ったワカサギはどう始末したものだろう。幸い次の日は所属している岩見沢混成合唱団の練習日になっていた。300gずつを小分けにして10袋にして、バス仲間に持って行ってもらった。この次はテナーに、そしてアルト、ソプラノのメンバーに持って行って貰う事にしよう。当面はそれを目標とすることにしよう。



「花火」は水中でユラユラと妖しく漂った

【1月22日（金）8:00～15:00】

1月19日に討ち入りをかける予定だった旭川の赤穂浪士たちが、全道中を駆け抜けた猛吹雪のため、22日に変更して遊水池に来ることになった。今回は、大石主税、赤埴源蔵、間十次郎が討ち入りした。

吉良上野介屋敷への討ち入りで、最年少ながら裏門大将を務めた大石主税は、身長が五尺七寸前後あったという。弁慶さながらの風貌からして最年少とは見えないのだが、原元辰の堀部武庸宛書簡に「主税、年ばいよりひね申し候」というくだりがある。若い、早くからしっかり者だった。

赤埴源蔵は、吉良屋敷への討ち入りでは裏門隊に属して戦った。この時、菅谷政利と屋敷内に討ち入り、小者の着物を着た男と出会い見逃すが、後にこの男が吉良家の家老・斎藤宮内と知り、大いに悔やんだという。また、引き上げに際して、火事にならぬよう吉良屋敷の火の始末をしている。

間十次郎は、吉良屋敷討ち入りには父や弟とともに参加し、表門隊に属している。邸内へ一番乗りし、騒ぎ立てる門番を縛り上げた。十次郎たちが炭小屋を探索したところ、2人の男が飛び出してきた。これを斬り捨てると、隠れていた白髪の老人が脇差しを抜いて飛び出してきた。十次郎が初槍をつけ、死体を改めると吉良上野介と判明。十次郎が首をはねた。

岩見沢からは、私こと吉良上野介と堀部安兵衛が駆けつけて遊水池に集った。私は安兵衛のテントに、旭川組は、十次郎が用意した大型テントに潜り込んだ。この日は、はじめの頃こそ順調で歓声が上がっていたが、10時を過ぎてくるとその歓声も途切れ途切れになってきた。切りのいいところで十次郎のテントを覗いてみると、なにやら薄暗い。テント生地が濃紺で厚手のものだったので天気の良い陽射しを浴びているにも関わらず暗いのだ。アタリも途絶えがちになってくるとその雰囲気も暗いものになってくる。初めのうちこそ澁刺とした歓談が続いていたのだが、妙にしんみりとした口調になっていた。テントに戻って、釣り続けた。1匹、1匹の釣りではあるが、丁寧にそのアタリを拾っていった。安兵衛も同じような釣りをしている。

隣の十次郎がテントの外に這い出たようだ。小用を足しに出たらしい。「おい、お前たち。なんだか黄色いものが所々に散らばっているぞ。元気がないな。俺の一撃で氷に穴を開けてみせる。」「どうだ。開いたか?」「いや、駄目だった。これからはみんな同じところで用を足せ。力を合わせてなんとか穴を開けるのだ。鬼の一念というぞ。それとも塵も積もれば山となるか?」「若いときは、女を泣かせるほどの勢いがあつたが、今では無理だ。」「穴を開けるどころか、そもそも穴の入口でふにやり、ふにやりと留まっていることしかできないだろう。」「お前の竿みたいだな。」「おい、竿にアタリが出ているぞ。これもふにやり、ふにやりと元気がないぞ。小物だな。」

だんだん怪しい口上になってきた。この辺で切り上げるのが妥当だろう。2時に旭川組が引き上げた。源蔵は今まででは最高の釣りをしたらしい。200匹ぐらいは釣り上げただろうか。帰りに、私の釣果をお土産にして持たせて上げた。それから私と安兵衛は1時間ほど釣り続けた。釣れ方がよくなってきて、家で量ってみると260gあった。引数でいうと130匹ほどになるだろうか。

安兵衛から電話が掛かってきた。「今日の釣果を量ってみると2200gあった。お前は俺よりも釣っていたから3000g近く釣っていたのではないか?」という。他人を讃える傾向のある安兵衛の言うことだから当てにはできないが少なく見積もっても1000匹の大台を超えたことになるだろう。私は源蔵に持たせて上げたので量ることはできなかったが、なんだかワカサギ釣りが板に付いてきたように思う。



旭川から赤穂浪士が駆けつけた。左から間十次郎、大石主税、赤埴源蔵。

【1月23日（土） 8:00～12:00】

ワカサギテントを購入した。コールマン・アイスフィッシングシェルター・オートL（300×300×160）という代物である。今まで使っていたものは、平成17年に購入したもので、11年間も愛用してきたことになる。携行に便利なサイズ（140cm×140cm×145cm）でこれもコールマンだった。底面積だけみると、今回購入したテントはその4倍になる。

息子に手伝わせながら、テントを家の中に持ち込んで組み立ててみた。骨組みを広げていくと頂点にある油圧式シリンダーが働き、自動的に開いていった。すると6畳の和室に全部が収まらず、居間の方にはみ出してしまった。想像していたものよりも大きいのに驚かされた。張り終わって中に入った息子が「なんだかワクワクしてくるね。子どもの頃に戻ったようだ。」と言った。

下の娘が2才になって子どもたちをキャンプに連れ出すことができるようになると、早速わが家では野外テントを買った。そして、子どもたちに手伝わせながら家の中でテントを広げたのだが、やはり部屋には収まらなかったのだ。その時のことを思い出したらしい。もちろん私だってワクワクしていたのだ。その時はすぐ近くの公園に繰り出してテントの中で一晩を過ごしたのだ。

さて、テントが大きくなってみると、今まで使っていたソリでは運ぶことが困難になりそうだ。それで、ソリの両端に穴を開けて、ロープを括り付けた。そのロープにゴムバンドのフックを引っかけて、荷物を括り付けるようにしたのだ。

23日（土）、今日は息子と一緒に荷物運びは息子に任せて楽な思いをした。7時、遊水池に辿り着くと、駐車帯には車がビッシリと並んでおり、農道の路肩にも車が並んでいた。池の畔に下りていくと数多くのカラフルなテントが立ち並んでいた。今までは気にしていなかったが、先日購入した私のテントと同じものが多いのに驚かされた。

ソリも含めて全ての荷物をテントの中に入れたがまだまだ余裕があった。今まで使っていた手元暖房に代わってガスストーブを持ち込んだ。このガスストーブは万が一の地震対策のために購入してあったものだ。今回、目的外で初めて使うことになった。

8時には二人して釣り始めた。出だしは快調だった。しかし、すぐに釣れ方が怪しくなってきた。息子はこんなに釣れるのにといっているが、私としては20日、そして22日の大釣りがあるので物足りないのだ。

今日は、新テントの設置テストを兼ねての釣りなので、12時までの釣り時間を設定してあった。数釣り目標ではないので気持ちに余裕を持って片付けることができた。釣果を量ってみると二人で700gだった。



新しいテントは快適だった。



1月23日の釣果は残念ながら700g

【岩見沢釣遊会平成28年度新年総会】

平成28年度総会が1月23日(土)、「俵」で開催された。総会では27年度事業報告、会計決算報告、28年度事業計画・予算案等が承認された。また、新役員には会長に吉井博氏、副会長に西川紘一氏、監査に谷口良幸氏、会計に岡英成氏が選出された。新会長からは、今後の会の運営に対しての熱い思いが語られた。

また、その場で28年度の日程が組まれた。「とんとん会」との合同大会を4回、単独大会が3回、その内の1回は、「とんとん会」に臨時会員として乗って頂けることになっている。

新年会では、年間入賞者を表彰しながら酒を酌み交わし、前年度のねぎらいと新年度の抱負を語り合った。年間優勝者は前野氏との激しいデットヒートを制した嵐光博氏で栄えある優勝旗を新会長から受け取った。それで準優勝者は前野氏、3位には17点で並んでいた西川氏、堀内氏を僅かに上回った私がくい込んだ。

年間魚種別大物賞には、アブラコ48.3、ホッケ39.6の西川氏、カジカ47.2の堀内氏、アカハラ47.1の嵐氏、そしてこれが最も肝心なところなのだが、歴代大物を塗り替える58.2cmのタカノハをものにした私が頂いた。

さて、4月よりまた新たな戦いの幕が切って落とされるわけだが、なにより自然との会話を楽しみながら、安全な釣りに心がけていきたいものである。そして是非ともまた58.

2 cmを超える大物をぶら下げている会員の皆さんの笑顔をカメラに収めたいものである。



年間優勝：嵐 光博氏（左）、新会長：吉井 博氏